

「第 105 回東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議」

令和 4 年 10 月 27 日（木）14 時 00 分
都庁第一本庁舎 7 階 特別会議室（庁議室）

【総務局理事】

それではただいまより、第 105 回東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議を開始いたします。

本日も感染症の専門家の先生方にご出席をいただいております。

東京都新型コロナウイルス感染症医療体制戦略ボードのメンバーで、東京都医師会副会長の猪口先生。同じく戦略ボードのメンバーで、国立国際医療研究センター国際感染症センター長の大曲先生。

東京 iCDC からは、所長の賀来先生。東京都医学総合研究所社会健康医学研究センター長の西田先生。

そして、医療体制戦略監の上田先生にご出席をいただいております。

また、本日は、東京 iCDC 専門家ボードのメンバーで、放送大学教養学部教授の奈良先生にウェブでご出席をいただいております。よろしくお願いいたします。

なお、武市副知事、潮田副知事、宮坂副知事、ほか 5 名の方につきましても、ウェブでの参加となっております。

それでは議事に入って参ります。

まず、「感染状況・医療提供体制の分析」のうち、「感染状況」につきまして、大曲先生からご報告をお願いいたします。

【大曲先生】

それでは、ご報告をいたします。

「感染状況」でございます。色は「黄色」です。「感染状況の推移に注意が必要である」としました。

新規の陽性者数の 7 日間平均は横ばいとなっております。基本的な感染防止対策を徹底することによって、新規陽性者数をできる限り抑制していくとともに、早期のワクチンの接種を呼びかける必要がある、といたしました。

それでは、詳細に移ります。

①新規の陽性者数でございます。

7 日間平均であります。前回の 1 日当たり約 3,397 人から、今回は 1 日当たり 3,305 人となっております。また、今週先週比であります。これは約 97% ございました。

このように、7 日間平均は、前回の 1 日当たり約 3,397 人から、今回 1 日当たり 3,305 人

と、横ばいとなりました。今週先週比も、前々回の約 72%から、前回は約 125%となりまして、今回は約 97%であります。100%前後で推移をしております、今後の動向を注視する必要がございます。

職場、教室、店舗など、人の集まる屋内では、定期的な換気を励行する、そして3密の回避、人と人との距離の確保、不織布マスクを場面に応じて適切に着用すること、手洗いなどの手指衛生、状況に応じた環境の清拭・消毒など、基本的な感染防止対策を徹底することによって、新規陽性者数をできる限り抑制していく必要がございます。

また、受診の仕方も重要であります。発熱や咳、咽頭痛などの症状があるなど、新型コロナウイルスに感染したと思ったら、まずは外出や人との接触、登園・登校、そして出勤を控えて、症状が軽い場合には、余裕をもって、かかりつけ医、発熱相談センター、そして#7119、又は診療・検査医療機関に電話相談をする、そして、特に、症状が重い場合や、急変時には速やかに医療機関を受診する必要がございます。

また、療養期間中の外出については、有症状の場合、症状の軽快から24時間経過後までは自粛が求められています。ですので、準備が必要でありまして、常備薬、市販薬、あるいは解熱鎮痛薬等や食料品等を少し多めに備えることが、備えとして必要であります。

ワクチンです。東京都の状況であります、10月25日の時点で、3回目のワクチンの接種率が、全人口では64.6%、12歳以上としますと70.9%、65歳以上では89.7%になりました。また、65歳以上における4回目のワクチンの接種率であります、前回は77.2%、今回は77.7%であります。

オミクロン株対応のワクチンが出ております。現在の流行の主体であるオミクロン株BA.5系統に対して、従来型のワクチンを上回る効果が期待できるとされております。都内の区市町村や都の大規模な接種会場では、2回目までのワクチン接種を終えた12歳以上の全ての方を対象として、オミクロン株対応ワクチンの接種を実施しています。また、国はオミクロン株対応ワクチンの接種間隔を5か月から3か月に短縮しました。それとともに、生後6か月から4歳までの乳幼児向けのワクチンを特例承認し、5歳以上とされていた初回接種の対象を、これ拡大をしております。都内においても、一部の区市町村から順次接種を開始しています。

今年の冬であります、季節性のインフルエンザと新型コロナウイルス感染症の同時流行が懸念されています。この流行状況に注意が必要です。同時流行が始まる前に、新型コロナウイルスに対するワクチンとともに、インフルエンザワクチンの、これは早期の接種を呼びかける必要がございます。

また、10月11日から入国制限が大幅に緩和されています。今後の感染状況に注意するとともに、外国人の観光客が陽性となった場合などでは、「外国人観光客の受入れ対応に関するガイドライン」、観光庁から出ておりますが、こちらに準じた対応が必要であります。

また、変異株であります、米国では流行の主体はオミクロン株BA.5系統であります、オミクロン株の亜系統である「BA.4.6系統」及び「BF.7系統」の割合が上昇しています。

今後の動向を注視していく必要があります。都では、東京都健康安全研究センターにおいて、これらの亜系統にも対応した新たな変異株 PCR 検査を実施をしています。

次、①-2 であります。

年代別の構成比でございます。新規の陽性者数に占める割合であります。40代が17.4%と最も高く、次いで30代で16.7%であります。行動が活発な20代から40代が依然として高い割合を示しておりまして、今後の動向を注視する必要があります。

次に、①-3 であります。

新規陽性者に占める65歳以上の高齢者の数であります。先週が1,755人、今週は2,008人です。割合は8.9%です。7日間平均を見ますと、前回は1日当たり約294人、今回は1日当たり301人です。

新規の陽性者数が横ばいとなっておりますが、一方で、65歳以上の高齢者数は、今週も先週に引き続き増加をしております。高齢者は重症化のリスクが高く、入院期間も長期化するのために、引き続き今後の動向に注意をする必要があります。

①-5 でございます。

第6波以降、新規陽性者数の7日間平均が最も少なかった6月14日、ここを起点としまして、10月16日までに都に報告があった新規の集団発生の事例をお示ししています。福祉施設が2,150件、学校・教育施設、ここには幼稚園・学校等が含まれますが93件、そして医療機関は258件でございます。

今週も複数の高齢者施設等で、施設内感染の発生が報告されています。基本的な感染防止対策を継続する必要があります。

①-6 であります。

都内の状況を地図で見えております。都内の医療機関から報告された新規の陽性者数の保健所区域別の分布を、人口10万人当たりで見ました。そうしますと、色が濃いのは、区部でありまして、区部の中心部が高い値となっております。

次、②です。

#7119における発熱等の相談件数であります。この7日間平均であります。前回は1日当たり61.7件、今回は1日当たり59.6件です。また、小児の発熱等相談件数の7日間平均であります。前回は1日当たり37.3件、今回は1日当たり26.4件となっております。

一方、都の発熱相談センターにおける相談件数の7日間平均を見ますと、前回は1日当たり約1,208件、今回1日当たり約1,179件となりました。

#7119における発熱等相談件数及び都の発熱相談センターにおける相談件数、これらの今後の動向を注視するとともに、感染の拡大に備えて、発熱相談センターの更なる体制の拡充について検討する必要があります。

次、③であります。

検査の陽性率です。この陽性率であります。前回は17.8%、今回は18.2%です。また、PCR検査等の人数の7日間平均であります。前回は1日当たり約10,707人、今回

は、1日当たり約10,205人です。

陽性率は前回に続き、今回も18.2%と、水準としては高い水準のまま横ばいとなっています。この他にも、把握されていない感染者が存在していると考えられます。

都は、抗原定性検査キットを全世代の「濃厚接触者」及び「有症状者」を対象に無料で配付をしています。また、今後の感染の拡大に備えて、配付を待たずに早期に検査ができるように、検査キットを事前に薬局等で個人で購入をして、備蓄しておく必要がございます。

また、都は、都内在住の、医療機関の発生届の対象者、これは65歳以上の方、妊婦さん、そして入院を要する者、新型コロナウイルス感染症の治療薬、もしくは酸素投与を要する者以外で、自主検査陽性の方、又は医療機関で陽性の診断を受けた方の登録を受け付ける「東京都陽性者登録センター」を、これを10月20日から24時間体制に拡大をして運営をしています。今週は4,103人が報告をされました。

私からは以上でございます。

【総務局理事】

ありがとうございました。

続きまして、「医療提供体制」につきまして、猪口先生からご報告をお願いいたします。

【猪口先生】

はい。では、「医療提供体制」について報告いたします。

総括コメントの色は「黄」、「通常の医療との両立が可能な状況である」。

前回横ばいとなった入院患者数は、今回は増加しました。今週新たに入院した患者数も先週と比べて増加しており、今後の医療提供体制への影響を注視する必要がある、といたしました。

では、個別のコメントに移ります。

初めに、オミクロン株の特性に対応した医療提供体制の分析について報告します。

(1) 新型コロナウイルス感染症のために確保を要請した病床の使用率は、前回の19.6%から、10月26日時点で22.9%、

(2) オミクロン株の特性を踏まえた重症者用病床使用率は、前回の6.0%から7.6%、

(3) 入院患者のうち酸素投与が必要な方の割合は、16.6%から15.0%、

(4) 救命救急センター内の重症者用病床使用率は、67.5%から69.6%となりました。

(5) 救急医療の東京ルール適用件数は、1日当たり83.3件です。

では、④救急医療の東京ルール適用件数について述べます。

東京ルール適用件数の7日間平均は、前回の1日当たり86.4件から83.3件となりました。

東京ルール適用件数の7日間平均は依然として高い値で推移しており、救急医療体制は未だ影響を受けております。

救急搬送においては、救急車の現場到着から病院到着までの時間が、新型コロナウイルス感染症流行前の水準と比べると、依然延伸したまま推移しております。

⑤入院患者数です。

10月26日時点の入院患者数は、前回の1,100人から1,310人に増加しました。

入院患者のうち酸素投与が必要な患者数は、前回の183人から196人となり、割合は前回の16.6%から15.0%となっております。

今週新たに入院した患者数は、先週の491人から607人となり、入院率は2.7%でした。

都は、各医療機関に要請する病床確保レベルを、レベル1の5,283床としており、昨日の時点で、稼働病床数は3,969床で、稼働病床数に対する病床使用率は33.0%です。

前回横ばいとなった入院患者数は、今回は増加しました。今週新たに入院した患者数も先週と比べて増加しており、今後の医療提供体制への影響を注視する必要があります。

今年の冬は、季節性インフルエンザと新型コロナウイルス感染症との同時流行が懸念されており、発熱外来、オンライン診療の拡充など、医療提供体制を強化していく必要があります。入院調整本部への調整依頼件数は61件でした。

⑤-2です。

年代別割合は80代が最も多く、全体の約31%を占め、次いで70代が約20%でした。

入院患者のうち、重症化リスクが高い60代以上の高齢者の割合は、約76%と高い値のまま推移しており、注視する必要があります。

⑤-3です。

検査陽性者の全療養者のうち、入院患者数は1,310人、宿泊療養者数は931人、自宅療養者等の人数は20,908人、全療養者数は23,149人でした。

発生届対象外の患者は、東京都陽性者登録センターに登録することで、「My HER-SYS」による健康観察、食料品やパルスオキシメーターの配送、都の宿泊療養施設等への入所など、療養生活のサポートが受けられることを、都民に周知する必要があります。

都は、東京都医師会・東京都病院協会の協力を得て、現在32か所の宿泊療養施設を運営しており、9月30日に宿泊療養施設の稼働レベルを、レベル1に引き下げました。今後、各施設の一部フロア休止などを行い、確保している約13,000室を、約9,000室に変更して対応しております。

⑥重症患者数です。

重症患者数は前回の11人から17人に増加しました。年代別内訳は、10歳未満が2人、10代が1人、30代が1人、40代が2人、50代4人、60代2人、70代2人、80代3人です。性別は、男性13人、女性4人でした。また、重症患者のうち、ECMOを使用している患者は1人です。

人工呼吸器又はECMOを使用した患者の割合は0.02%でした。

今週、新たに人工呼吸器又はECMOを装着した患者が11人、離脱した患者が6人、使用中に死亡した患者は1人でした。

今週報告された死亡者数は 33 人、30 代が 1 人、40 代が 3 人、50 代が 1 人、60 代が 3 人、70 代が 3 人、80 代が 15 人、90 代が 7 人でした。10 月 26 日時点で、累計の死亡者数は、5,986 人となっております。

今週、人工呼吸器を離脱した患者の、装着から離脱までの日数の中央値は 4.5 日、平均値は 8.7 日でした。

高齢者のみならず、ワクチン未接種者、肥満、喫煙歴のある人は、若い人であっても、重症化リスクが高まることが分かっております。また、感染により、併存する他の疾患が悪化するリスクや治療に影響を与える可能性を有していることを啓発する必要があります。

⑥-2 です。

オミクロン株の特性を踏まえた重症患者数は、前回の 25 人から 32 人となっております。年代別内訳は、10 歳未満 2 人、10 代が 1 人、30 代 1 人、40 代 3 人、50 代 5 人、60 代 4 人、70 代が 5 人、80 代 9 人、90 歳以上が 2 人であります。

オミクロン株の特性を踏まえた重症患者 32 人のうち、人工呼吸器又は ECMO を使用している患者が 17 人、ネーザルハイフローによる呼吸管理を受けている方が 9 人、その他の患者が 6 人でした。

オミクロン株の特性を踏まえた重症患者数は 10 週間連続して減少しておりましたが、今回は前回と比べ増加いたしました。病床使用率は 10%を下回って推移しているものの、今後の動向に注意が必要であります。

⑥-3 です。

今週、新たに人工呼吸器又は ECMO を装着した患者は 11 人であり、新規重症患者数の 7 日間平均は、前回の 1 日当たり 1.0 人から 1.7 人となっております。

私の発表は以上であります。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまご説明のありました分析シートの内容につきまして、何かご質問等ございましたでしょうか。

よろしければ、都の対応についてに移ります。

まず、「第 1 波から第 7 波までの状況と成果」につきまして、黒沼副知事からご報告をお願いいたします。

【副知事】

はい。この度、「新型コロナウイルス感染症対策に係る東京都の取組－第 1 波から第 7 波までの状況と成果－」を取りまとめをいたしました。

これまで、都は、都民・事業者・医療従事者の皆様の多大なるご尽力もありまして、都民の生活と命を守ることを最優先に、全庁各局で協力をしながら、総力を挙げて対策を講じて

参りました。

爆発的な感染拡大を迎えた第7波におきましても、これまで「東京モデル」として強化をしていきました、保健医療提供体制の戦略的な枠組み、これを生かしつつ、先手先手の対策を講じて参りました。これにより、新たな行動制限を行うことなく、感染拡大の防止と社会経済活動の回復等の両立を推進し、その結果、これまでの他の波と比較し、また世界各国と比較しましても、スライドにお示しの通り、重症者数・死亡率は低水準に抑えることができております。

また、国が「With コロナに向けた政策の考え方」を決定し、今後、感染症法の改正なども予定をされる中、都は、有識者や専門家からのヒアリング等も行いながら、コロナと共存する社会を実現するための取組など、国への要望を数次にわたり実施しております。

この資料は、こうした状況やこれまでの成果、過去の波との感染状況の比較などを取りまとめたものでございます。

今後、この資料を、専門家の皆様との意見交換や、海外も含めた対外的な発信、国への働きかけなどに活用するとともに、今後、仮に変異株等による新たな感染の波が生じた場合でも、これまでの知見と経験を最大限に生かし、状況に応じた対策を機動的に講じて参ります。私からは以上です。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまのご報告につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

よろしければ、次に、「都民・事業者への感染防止対策等の呼びかけ」につきまして、総務局長からご報告をお願いいたします。

【総務局長】

はい。私から、「この冬の感染拡大を見据えました、都民・事業者の皆様への呼びかけ」についてご説明申し上げます。

まず、呼びかけについての考え方でございます。

国は新たな行動制限を行わない方針のもと、先月「With コロナに向けた新たな段階」へ移行することを表明いたしまして、保健医療の重点化と患者の療養期間の見直しを行うとともに、水際対策の緩和ですとか、全国旅行支援などを開始してございます。

都は、こうした国の動きや、「感染拡大防止と社会経済活動の回復との両立を進める」方針を踏まえまして、「都民一人ひとりがワクチン接種や自主的な感染防止対策を徹底した上で、日常生活や余暇を充実する」という考えで呼びかけを行って参ります。

具体的な内容は、スライドにございますように、「つぎの波にはもう乗らない」を標語に、年末年始を安心して過ごすためのオミクロン株対応ワクチン等の早期接種、換気の徹底や、特に混雑した場所、会話時のマスクの着用、発熱時などに備えた検査キット等の備蓄につい

て、重点的に呼びかけて参ります。

都民・事業者の皆様への呼びかけについては以上でございますが、なお、これらに係る職員の事務の特例的な対応につきましても、段階的に見直していく予定でございます。

私からは以上でございます。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまのご報告につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

よろしければ、次に、「ワクチン接種キャンペーン、備蓄、第7波の特徴」につきまして、福祉保健局長からご報告をお願いいたします。

【福祉保健局長】

はい。まず、新型コロナワクチンについてでございますが、広く都民にワクチンの早期接種を働きかけるため、「新型コロナワクチン接種キャンペーン 2022 秋冬」を実施し、集中的な広報等を展開いたします。

具体的にはまず、森ビル株式会社及び港区と連携し、11月に虎ノ門ヒルズ森タワー内に臨時の接種会場を設置し、ご覧の日程で接種を行って参ります。

また、飲食店コロナ対策リーダーを通じて、従業員の方や来店された方に対して、ワクチン接種を呼びかけて参ります。

次に、社会経済との両立に向けて、TOKYO ワクシオンアプリを活用し、3回以上接種した方を対象に、オリンピックのサイン入りグッズなどの特典を提供いたします。

また、先週20日から始まった「ただいま東京プラス」や、昨日から再開をいたしました「Go To Eat」のウェブサイトにおいて、ワクチン接種促進のPRを行うほか、都や区市町村の接種会場において、都内銭湯の無料入浴券「1010（銭湯）クーポン」を配布するなど、接種を促進いたします。

そのほか、約150の駅や電車内にポスターを掲示するとともに、味の素スタジアムで実施されるスポーツイベントにおいて、チラシを配布するなど、様々な広報媒体を活用して、都民への普及啓発を行って参ります。年末年始に向けて、ワクチンの早期接種を促進して参ります。

次に、新型コロナとインフルエンザの同時流行への備えについてです。

この冬の同時流行に備えて、ご自宅での備蓄、コロナやインフルエンザのワクチンについて分かりやすくまとめたリーフレットを作成いたしました。

こちらのリーフレットを活用して、検査キットや解熱鎮痛薬、食料品などを準備しておくとともに、ワクチン接種もご検討いただけるよう、都民に呼びかけて参ります。

次に、第7波の特徴について、過去の感染の波と比較しながらご報告を申し上げます。

過去の流行と比較するため、感染のピークの月とその前後1ヶ月を含めた3ヶ月を一つ

の波として、感染の規模が比較的大きかった第3波、第5波、第6波、第7波について比較を行っております。こちらのスライドは、総括表でございます。

次に、こちらのスライドは、分析の要点でございます。詳細は、次のスライド以降で説明をいたします。

まず、新規陽性者数と重症患者数の推移でございます。

過去の流行を見ますと、夏と冬に感染が大きく拡大をしております。

特に、オミクロン株感染下である第6波、第7波では、これまでの波を大きく上回る感染規模となっている一方で、重症者数は、他の波に比べて少なくなっております。

この冬の感染拡大に備え、ワクチン接種の促進や医療提供体制の充実により、さらに重症者数を抑え、医療機関への負荷を低減していくことが重要でございます。

次に、年代別の新規陽性者数の7日間平均の推移でございます。

いずれの波も、20代、30代、40代の感染規模が大きく、立ち上がりも急であり、その後、一定の時間をおいて、60歳以上の世代が、感染ピークを迎える傾向が見られます。

また、第6波以降、オミクロン株流行下では、その波の立ち上がりが急となっており、先手先手の対策が必要となっております。

次に、年代別の入院患者数を見ますと、第5波では、40代、50代の比較的若い世代が入院の中心であるのに対して、第6波からは、60代以上の占める割合が増加し、第7波は、その割合がさらに増えております。

特に、80代以上が全体の約半数を占め、重症化リスクの高い高齢者への医療提供体制の整備が重要でございます。

次に、こちらは年代別の入院患者数の割合です。

オミクロン株流行下の第6波以降、高齢者の占める割合が高くなっているほか、10歳未満が第6波と比較して微増をしております。

死亡者数については、第7波ではこれまでの波を大きく上回る新規陽性者数が発生したことに伴い、死亡者数も増加をしております。

一方で、死亡率は波を下るごとに低下傾向にありまして、全世代の死亡率を見ますと、第7波が最も低くなっております。

また、第7波では10代以下で10名の方が亡くなられており、これまでの波と比較して多くなっております。

小児についても、第7波では入院患者数も多い傾向になっておりまして、ワクチン接種をさらに進めていく必要がございます。

次に、死因について、第7波では、約3割が新型コロナ以外の原因で亡くなられております。

亡くなられた方のうち、基礎疾患を有する方の割合は、第3波、第5波、第6波いずれの割合も7割を超えておりまして、第7波では9割と最も高くなっております。

オミクロン株流行下においては、肺炎症状そのものよりも、基礎疾患等の悪化により死亡

する方が多かったことが見て取れます。

第6波と第7波の同一感染源からの複数発生事例を比較いたしますと、報告件数及び陽性者数はいずれも微減となっております。

第7波では、高齢者福祉施設の報告件数の構成比が増加しておりまして、全体の6割を占めております。1件当たりの平均陽性者数は11.4人から9.1人に減少しております。

医療機関における報告件数は、第6波の146件から236件に増加し、1件当たりの平均陽性者数も増加をしております。

繰り返しになりますが、第7波では、これまでにない規模で感染が拡大をいたしました。今年の冬に向け、新型コロナとインフルエンザの同時流行も懸念されております。まずは、ワクチン接種の推進をさらに加速をいたします。その上で、第8波は、過去最大規模となる可能性も見据えて、必要な医療を的確に提供できるよう、先手先手で検討を進めて参ります。私からは以上でございます。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまのご報告につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

よろしければ、東京iCDCの報告に移ります。

まず、「東京iCDC リスコミチームによる都民アンケート調査結果」につきまして、奈良先生からご報告をお願いいたします。

【奈良先生】

はい。報告いたします。

今回の調査は、10月1日から3日にかけて実施しました。調査概要はこちらの通りです。

次、お願いします。

まずは、現時点での感染防止対策の取組についてです。

「マスクの着用」や「密を避ける」といった項目で、8割9割が気をつけていると回答しています。

「夜間外出を控える」や「県境またぎの移動を控える」は約55%と、2022年2月調査と比べると15%程度減少しています。

総じて、多くの都民が徐々に日常生活を取り戻しつつも、感染防止対策を続けているということがわかります。

次、お願いします。

次に、この冬はどうかということを探った結果です。

「屋内でのマスク着用」、「部屋の換気」などは、7割の人が続けるつもりと回答し、「外食、会食」、「旅行やレジャー」などを「増やす」と、3割の人が回答しています。

都民の皆さんが外食や旅行などを楽しみにしつつも、この冬も基本的な感染防止対策を

継続しようとする慎重な姿勢が見て取れます。

では、次お願いします。

次に、さらに将来のことを聞きました。

新型コロナの流行にかかわらず、今後も定着して欲しいものを尋ねたところ、流行前からあった「手指衛生」などだけではなく、この流行下で、特に促進された「換気」、「3密回避」、「マスク着用」といったものの定着、さらには、流行下で本格化したライフスタイルである、「時差通勤、時差出勤」や「テレワーク」など、新たな働き方、学び方の定着を希望する割合が高いことがわかりました。

次、お願いします。

ここからは新型コロナワクチン接種についてです。

これまでに3回以上接種した人は7割を超えています。一方、接種を強く躊躇する人も1割程度おられます。

次、お願いします。

現時点でまだ1度も接種していない、その理由としては、「副反応の心配」、「効果への疑問」、「ワクチンの健康被害」が上位に上がっています。

次、お願いします。

こちらは、すでに1回、2回接種したと答えた方に、では3回目をどうするかを尋ねた結果です。

この3回目接種は、昨年12月から開始されたわけですが、現在なお1、2回接種で留まっている方の半数以上は、未だ3回目接種を躊躇する、そういう傾向があります。

次、お願いします。

その理由がこちらのスライドです。

3回目の接種をしない理由として最も多かったのが、「1回目、2回目の接種の後の副反応がなかったから」となっていました。次いで、「効果への疑問」、「副反応への心配」が上位に上がっています。

接種率を今後さらに高める上では、3回目接種の効果を改めて伝えるとともに、接種後の副反応への対応などについての情報を発信し、都民の接種についての意思決定を支援する必要があると思われます。

では、次お願いします。

すでに3回接種した方、そのうち、4回目について、「なるべく早く接種したい」、「急がないが接種したい」とする回答の合計は約7割となっています。

このうち、特に「急がないが接種したい」はおよそ5割と高く、今後、ワクチン接種を加速するには、この層への積極的な働きかけが有効になると考えます。

では、次お願いします。

こちらは新型コロナに関しての気持ちです。

「発熱」または「新型コロナに感染」した場合に、「適切な治療を受けられるかどうか

不安」とする回答が6割前後になっています。

「インフルエンザになった場合」にも、45%が不安を感じています。

この冬は、新型コロナと季節性インフルエンザの同時流行も懸念されています。都民に対しては、発熱等あった場合に、自分はどこにどう相談すればよいのか、どう対処すればよいのかについての、わかりやすい情報発信を行うことが求められます。

同時に、冬の流行時に備えて、検査キットや解熱鎮痛薬、食料品を準備するなど、都民が自主的に取り組むべき事柄を具体的に周知することも必要です。

それから、「インフルエンザワクチン接種」と「オミクロン株対応ワクチン接種」に前向きな回答はともに5割程度で、この2項目間には、正の相関が見られます。同時接種も含めて、ワクチン接種への希望に応える体制の充実が必要であるというふうに考えます。

私からは以上です。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまの奈良先生からのご説明につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

よろしければ、「都内主要繁華街における滞留人口のモニタリング」につきまして、西田先生からご報告をお願いいたします。

【西田先生】

はい。それでは直近の夜間滞留人口の状況につきまして報告を申し上げます。

次のスライドお願いします。

初めに分析の要点を申し上げます。

レジャー目的の夜間滞留人口は、2週連続で大幅に増加しております。1週間と比べますと16.8%、2週間と比べますと29.5%も増加しております。それに伴って実効再生産数も上昇し、1.0を上回る状況が見られています。

引き続き、基本的な感染対策を徹底していただくとともに、ワクチン接種をさらに推進していくことが重要と思われまます。

それでは個別のデータを見ながら補足の説明をさせていただきます。

次のスライドお願いします。

レジャー目的の夜間滞留人口は、ここに来て大幅かつ急激に増加しており、直近1週間で16.8%も増加しています。

2週間と比べますと、約30%近く増加してきており、人々のハイリスクな行動が、急激に増加してきている様子が伺えます。

次のスライドお願いします。

こちらは、新型コロナ流行前の2019年の夜間滞留人口と、流行後の2020年以降の同時期水準を比較したグラフです。

赤色のラインの右端が、2022年の直近の状況を示しておりますが、コロナ前の2019年の同時期水準と比べますと、32.5%低いところを推移しております。

これまでコロナ前の水準に比べて、概ね40%から50%低いところを継続的に推移してきましたが、ここに来てコロナ前の水準に徐々に近づいてきております。

次のスライドをお願いします。

こちらは20時から22時、22時から24時の夜間滞留人口と実効再生産数の推移を示したグラフです。

両時間帯ともに、直近のところ顕著に増加しており、それに伴って実効再生産数も急上昇し、1.0を上回る状況が見られています。

次のスライドをお願いします。

こちらは、都内におけるBA.4、BA.5系統の感受性人口の推計データと、深夜帯滞留人口のデータをかけ合わせたものの推移となります。

こちらを見ますと、直近のところで感受性の高い深夜帯滞留人口も急増しており、それに伴って実効再生産数が上昇しているように見えます。

今後、年末に向けてさらに人々の接触機会が増えていくことが想定されますので、それに先立って、オミクロン株対応ワクチンの接種を迅速に推進していくことが重要と思われます。

私の報告は以上でございます。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまの西田先生からのご説明につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。

よろしければ、「総括コメント」及び「変異株PCR検査」につきまして、賀来所長からご報告をお願いいたします。

【賀来所長】

はい。まず「分析報告」、「都の対応」、「都民アンケート調査結果」、「繁華街滞留人口モニタリング」についてコメントをさせていただき、次に、「変異株」について報告をさせていただきます。

まず、分析報告へのコメントです。

ただいま、大曲先生、猪口先生より、感染状況、医療提供体制についてのご発言がございました。

感染状況、医療提供体制、いずれも黄色で、感染状況は、新規陽性者数の7日間平均は横ばいであること、医療提供体制は、前回と比較し、入院患者数は増加しており、医療提供体制への影響を注視する必要がある、とのことでした。

今後に向けて、新規陽性者数をできる限りを抑制していくために、基本的な感染防止対策

を徹底するとともに、早期にワクチンを受けていただくことが重要であると考えます。

続きまして、東京都から、この冬に備えた都民への呼びかけやワクチン接種キャンペーンといった取組についてご報告がありました。

この冬の新型コロナウイルス感染症の第 8 波、そしてインフルエンザとの同時流行に備えるためには、積極的なワクチン接種と、一人ひとりの継続した感染防止対策の徹底、コロナ検査キット、解熱鎮痛薬や食料品などの備蓄を行うことは大変重要なポイントであると考えます。

そのためには、都民の皆様のご理解、積極的な取組に繋がるよう、しっかりとしたリスクコミュニケーションを行っていくこと、そのことが鍵になっていくものと思われま

す。続きまして、都民アンケート調査結果です。

奈良先生からは、東京 iCDC リスコミチームが行った、都民 1,000 人を対象にしたアンケート調査の結果についてご報告をいただきました。

アンケートの結果から、多くの都民が日常生活を取り戻しつつも、感染防止対策を続けていること、この冬に向けても対策を継続していく姿勢がうかがえたとのこと

です。また、4 回目追加接種の対象者のうち、「接種したい」と回答した人が約 7 割、とのご報告がありましたが、その方々にいかに速やかに接種をしていただくか、これから迎える冬の季節において、感染拡大を抑えるための重要なポイントになると考えま

す。続きまして、西田先生からは、都内繁華街滞留人口モニタリングについてご説明がありました。

夜間滞留人口は 2 週連続で大幅に増加し、実効再生産数も上昇し 1.0 を上回っているとのこと

です。ワクチン接種とともに、引き続き一人ひとりが感染防止対策を徹底することで、感染リスクを減らしていくことが大変重要であると考えま

す。続きまして、変異株について報告をさせていただきます。

スライドをお願いします。

こちらのスライドは、過去 1 年間のゲノム解析結果の推移です。

今回から、アメリカ CDC の公表方法も参考に、これまで BA.5 系統として報告してまいりました。「BQ.1 系統」と「BQ1.1 系統」について、初めて検出を確認した 9 月までさかの

ぼり、別系統としてご報告をいたします。それでは 10 月における解析結果ですが、「BA.2 系統」の占める割合が 0.8%、「BA.2.75 系統」が 1.8%、「BA.4.6 系統」が 0.3%、BA.5 系統の亜系統である「BF.7 系統」が 1.3%、同じく BA.5 系統の亜系統である「BQ.1 系統」が 0.5%、「BQ.1.1 系統」が 0.9%、BA.2 系統と BA.2.75 系統の組換え体である「XBB 系統」が 0.2%、「BA.5 系統」が 94.3%となっております。

次のスライドをお願いします。

こちらは先ほどのグラフの内訳です。

今回から分類に加えました「BQ.1 系統」は 18 件、「BQ.1.1 系統」は 28 件となっております。

「BA.2.75 系統」については、前回から新たに 30 件が確認されています。

また、ゲノム解析の結果、都内で初めて BA.2 系統と BA.2.75 系統の組換え体である「XBB 系統」が 6 件確認されております。こちらの詳細は別のスライドでご説明いたします。

次のスライドをお願いします。

オミクロン株亜系統が増えておりますので、こちらのスライドで変異株の世界的な状況について報告をいたします。

現在、世界中でゲノム解析が行われておりますが、国際的なデータベースに登録されたウイルスの 99.9% はオミクロン株であり、その他の系統はほとんど検出されておられません。

なお、数多く発生しているオミクロン株の系統の中でも、BA.5 系統が 76.2% と最も多く、世界的にも主流となっております。ただし、免疫逃避や感染者増加の優位性が示唆される亜系統も複数報告されています。

特に、「BQ.1 系統」は、イギリスやフランス、アメリカなど欧米において多く報告されており、「XBB 系統」はシンガポールやインド、バングラデシュで件数が増加するなど、局所的に有意な増加を見せる系統が報告されています。

しかし、現在のところ、特定の変異株が世界的に優勢となる兆候は見られておらず、また、今後の動向に関しても、一致した見解は得られておられません。

東京 iCDC では、引き続き、国内外の動向の注視、知見の収集とともに、ゲノム解析などにより監視して参りたいと思います。

次のスライドをお願いいたします。

こちらは、東京都が動向を注視している新たなオミクロン株亜系統について、感染性や重症度、免疫逃避といった特徴のほか、都内や諸外国における検出状況をまとめたスライドです。

いずれの系統も、BA.2 と比べて、免疫逃避の可能性が示唆されておりますが、感染伝播性や重症度について、詳しいことはまだわかっておりません。

赤枠で囲っております「BQ.1 系統」や、「XBB 系統」は、世界において局所的に有意な増加を見せておりますので、より注視していく必要があります。

次のスライドをお願いします。

こちらは都内で新たに確認された「XBB 系統」の追加情報です。

「XBB 系統」は、今年の 9 月にシンガポールで確認され、10 月 10 日時点で 21 か国から 562 件が報告されています。

シンガポール、インド、バングラデシュで検出の増加が見られており、9 月末からは感染者数が増加傾向にあるシンガポールでは、XBB 系統の割合の上昇が見られています。

日本では、10 月 17 日時点で、検疫において 7 件検出されておりますが、その大部分がインドへの滞在歴があるとのことでした。

XBB 系統の特徴としましては、中和抗体からの逃避の可能性が示唆されるほか、BA.2.75 系統や BA.4.6 系統に比べて、感染者増加の優位性が高い可能性があります。なお、重症度については現時点では不明となっております。

次のスライドをお願いします。

こちらはオミクロン株亜系統に対応した変異株 PCR 検査の結果です。

「BA.2.75 系統」については、新たな発生は報告、確認されていません。前回から報告を開始した「BF.7 系統」については、新たに 4 件確認され、9 件となっております。

次のスライドをお願いします。

こちらのスライドは、変異株の置き換わりの推移を比較したグラフです。

青色でお示ししている BF.7 系統が 1.9%、紫の BA.4 系統が 1.3% 検出されておりますが、都内における感染の主体は、引き続き赤色で 92.2% とお示ししている BA.5 系統となっております。

次のスライドをお願いします。

このスライドは参考にお示ししております。詳細については省略いたしますが、今後、変異株の動向についてはさらなる注意が必要であり、今後ともしっかりと監視していく必要があるかと思えます。

私からの報告は以上です。

【総務局理事】

ありがとうございました。

ただいまの賀来所長からのご説明につきまして、何かご質問等ございますでしょうか。よろしければ、会のまとめといたしまして、知事からご発言をお願いいたします。

【知事】

はい。猪口先生、大曲先生、賀来所長、西田先生、上田先生、そしてオンラインで奈良先生、お忙しいところありがとうございます。

今週の感染状況、医療提供体制は、先週と変わらずに、ともに黄色を示しております。

先生方からは、新規陽性者数の 7 日間平均は横ばい、前回横ばいとなった入院患者数は、今回は増加、というご報告をいただきました。

賀来先生からは、海外では BA.5 以外のオミクロン株の亜系統の割合が増加していること、そして、それは都内でも確認をされている、また、引き続き感染動向の監視が必要である、というご報告をいただきました。

奈良先生からは、都民 1,000 人アンケート調査の結果について、感染対策に対する意識や、ワクチンの接種の意向に関しますご報告をいただきました。ありがとうございます。

さて、この冬には、新型コロナと季節性インフルエンザの同時流行が懸念をされている、そういう中で、専門家の方々のご意見を踏まえまして、先手先手で必要な対策を講じていた

だきたい。

また、都民の皆さんに対しては、3つの実践を呼びかけていただきたい。つまり、「攻めのワクチン」、「守りの換気とマスク」、「医薬品などの備え」であります。

都におきましては、第7波までの取組の状況と成果などを取りまとめております。第7波では、「東京モデル」を生かしつつ、重症者数、死亡率を低い水準に抑えることができました。

今後も、これまで積み重ねた知見、そして経験を生かして、しっかりと取り組んで参りましょう。

以上であります。ご苦労様です。

【総務局理事】

ありがとうございました。

以上をもちまして、第105回東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議を終了いたします。

なお、次回の会議日程は、別途お知らせをいたします。

ご出席どうもありがとうございました。

【知事】

ありがとうございました。